

自由な社会にこそ、自由な音楽は誕生する

苺がプラスチックの箱に詰められて、並んでいる。

そこから、2つのパックを取り出す。

ひとつは、大粒でいかにも甘そうな苺が上部に数個並んでいるが、その下部には、小粒で痩せた実ばかりが詰められている。大粒のものはともかく、小粒のものは、砂糖やミルク、コンデンスミルクなどをかけて無理に食べるか、あるいはジャムにでもするしかなさそうだ。このパックは、バブル崩壊後の日本の音楽シーンを思い起こさせる。志の高い数人のミュージシャン以外は、味付けや加工でもしないと食べられない、聴くに耐えない音楽を作る若い子たちばかりなのだ。

もうひとつのパックは、中々大粒の生で食べられる甘い苺ばかりで、痩せた実の粒はほんの数個。70〜80年代初期までの日本の音楽シーンは、こんな素晴らしい苺パックばかりだった。だから、次の苺のシーズンに彼らミュージシャンの次作品が、楽しみでならなかった。現在のシーズンで、次のシーズンが楽しみな人は、数えるほどしか存在しない。楽しみなそういつた人たちの多くは、70〜80年代に出現したミュージシャンが多い。90〜00年代に登場したミュージシャンは、セールの的に大きな実りがあっても、音楽性には、首をひねらざるを得ない人が多すぎる。

こう考えている方は、ぼくの周囲の音楽業界には大勢いる。でも、音楽を聴いてその感想を書いて収入を得ることを生業としているぼくには、批判を文章にしたからといって、掲載して頂ける雑誌も

ない。実際にそういった批判をした故に、仕事を止められたこともある。

ぼくは、活字中毒者にして、音楽中毒者である。しかも重度の合併症で、その両方が充実していないと、日々の満足が得られないタイプなのだから困る。

本を読む人は若年層では著しく減ったと思うが、幸い読みたい新刊は次々と出てくる。けれど、音楽シーンでは、若年層向けの添加物でんこ盛りの音楽らしき騒音はあつても、心から聴きたくなるアルバムは数が少なすぎる。

団塊の世代から60年代生まれの世代は、ビートルズを同時体験、または、記憶が伝説化する前に後追体験をしている。

これはどういうことかという、凄く良質なポップ・ミュージックを若い感性で聴いていたということだ。ビートルズには、ポップス、R&B、ロックンロール、ロック、アヴァンギャルド・ミュージックなど、あらゆるサウンドが詰まっていた。それらが進化していったサウンドも聴いている。オーティス・レディング、ジャニス・ジョプリン、ドアーズ、レッド・ツェッペリン、ニール・ヤング、キャロル・キング……。書き出せばキリのない良質な音楽を聴いてきた、耳の肥えた世代なのだ。

本書に登場するミュージシャンたちのほとんどは、そういった時代に生まれ、良質な音楽を元気の素として育ってきている。しかも、日本の音楽ということも常に念頭に置きながら、育ってきた人たちばかりだ。

ぼくが、この本を書こうと思つた時、まずふたつのアイデアがあつた。

ひとつは、50年代から現代までの日本の音楽史を、文化、風俗、政治、戦後民主主義などと関連づけて書くというものだつた。実は、少し書き始めたのだが、これは読む人に楽しい本にはならないと思ひ断念した。

ふたつめは、この本に登場することになるミュージシャンたちにインタビュース、それを中心に構成するというアイデアであつた。しかし、これだとミュージシャンたちの現在いまは語られても、過去はそんなに語られない。多くのミュージシャンやスタッフたちは、常に現在進行形で現場にいる。20年や30年前の思い出話はあまり語ってくれないし、語ってくれたとしても、もはや伝説化されているような、誰もが知つている話だけに終わつてしまふ恐れがあつた。

悶々と悩みながら、66年頃から保存しているスケジュール帳を眺めていて、ふと思ひ立つた。

例えば、70年代のスケジュール帳には、竹内まりや、山下達郎、大滝詠一など、この本に登場するミュージシャンとの出会いの日時や、彼らのコンサートの日程などが記されている。インタビュースで使つた山のようなカセットテープの中には、彼らの「その時」が、音質は劣化しているものの、残されている。

再聴してみると、現在の彼らと会うより、明らかに面白くなりそうだと思へた。昔から現在までを、同じイメージの中で書ける——そんな気がしたのだ。